The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	聴くことの「入り口」
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 3, p. 12-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5449
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集：ケアの現場に触れる

聴くことの「入り口」

堀江　剛

二回目の実習で、ある入所者との会話を記録に残した。会話記録を作ってみて考えたのは、会話そのものがケアになる時のきっかけはどのようなものか、といったものだった。人の話を聴くことがそのままケアになるとすれば、その入口に当たるものは何か。Aさんとの会話記録に基づいて、この「入口」の問題を考えてみたい。

［状況］女性73歳Aさん（左半身麻痺、痴呆軽度）。お昼ご飯のため声を掛けに行って話しとなった。部屋はみんな昼食にいっていたので、僕とAさんだけであった。約20分ほど話す。

H：おばあちゃんお昼、お昼ご飯ですよ。食べにいきますか。
A：ああ、・・・誰や、・・・息子やとおもた。
H：（近づいて）こんにちは。（ベッドの傍らにしゃがんで）息子さんようここにきやはんの。
A：前はそうでもなかったんやけど、最近はよう顔あわせに来てくれます。ええ息子です。
H：ふーん、ええ息子さんなんや、よう来てくれはるんや。息子さん何してはんの。
A：車の会社に勤めてます。あんたとこは何してはんの。
H：今はなんにもしてへんけど、親父が毎日畑作ってます。
A：野菜作ってはんの。
H：ええ、野菜作ってます。
A：ええなあ、野菜。大根とかほうれん草とか・・・
H：うんうん、大根とかほうれん草とか、なすびとか・・・
A：なすび。ええなあ。（急に泣き顔になって）ええなあ、おばあちゃんに食べさせてやりたいわ。
H：おばあちゃん？。
A：うん、うちのおばあちゃん（おそらくこの人の母親だと思われる---注堀江）。もうとっくにし死なはったけとな、おばあちゃん野菜好きやった。野菜の料理も上手やった。おばあちゃんに野菜食べさせてやりたいわ。おいしい野菜たべさせてやりたいなあ・・・

Aさんの「息子やとおもた」は、やや唐突な反応であった。Aさんは、この施設で密かに常に息子さんが訪問してくれるのを望んでいたと考えられなくもない。Aさんの「ええ息子です」という言葉は、その前の理由（最近よく施設へ来てくれるようになったこと）から自然に出てきたものであった。しかし、今から思い出してみると、あまりに自然な通りいっぺん過ぎる「ええ息子」であるという印象を与える。もしかしたら、Aさんは、息子さんがあまり来てくれなくて寂しい分、僕に通りいっぺんの「ええ息子」を説明して、それで自分で「ええ息子」だと納得したかったのかも知れない。「ええ息子」という言葉は、Aさんが何か息子について語りたいというきっかけになったのではなく、むしろ息子について深く語りたくないために使った表現なのではないか。実際僕が「息子さん何してはんの」と問いかけたとき、Aさんは自分の息子について多くを語らず、逆に「あんたとこは何してはんの」と問い返された。

ところで「野菜作ってはんの」も、やや唐突に、Aさんの思い込みを込めたような言葉として表出されたように感じた。このような「野菜作る」といった何気ない言葉に、その人にとって十分感情を入れ込むことができるような、いわば「スピリチュアル」なケアへの糸口があるのかもしれない。これは推測だが、Aさんは「野菜作る」という言葉を偶然口に出したことによって、自分の過去を「物語る」契機を見出したのではないか。これは十分ありうることである。僕は、まったく単純な繰り返しをするにとどめ、Aさんの反応を待った。Aさんからは、次々に野菜の名前が出された。また、Aさんの言葉に次いで、僕も思い出すままに野菜の名前を挙げてみた。そして、これも偶然に「なすび」という僕の言葉にAさんは深く感動したようだった。そこからAさんの過去の「物語り」（Aさんのお母さんの話）が突然のように出てきた。

会話の中で、何気なく偶然に出た言葉（この場合は「野菜作る」と「なすび」）が「物語り」を作るきっかけになっている。それはあらかじめ知ることは出来ない。おそらく会話の中で何度か、そのような物語への入口にあたる言葉が発せられているのだろう。後で看護士の西川さんと話していて、このような「傾聴」（高々30分～一時間程度）は職員には絶対できないもので、それ自体大切なケアである、ということになった。そういうところがボランティアの意味なのか、とも思った。それは「傾聴」というコミュニケーション行為がそうであるように、決して計画的になされるのはなく、偶然起こるようなも

のをたっぷり含んでいるからだと考えられる。

おそらく、「傾聴」によって人がケアされるかどうかは、こうした偶然的な要素が大きいものであり、またそれだからこそ、通常の積極的になされるケアとは別の意味でのケアがそこで成り立つと言えるのだろう。Aさんがこれまで生活してきた中で親しんだ言葉を、ゆっくり「聴く」ことを通じてAさん自身に投げ返す作業そのものが、ケアになるのである。それはある意味で、やろうとして出来る一方的なケアではない。そうではなくて、受け身に徹して「待つ」ことであり、ケアされる人が自分の生活の中で発した言葉を聞き逃さないための時間を設けることなのである。

（ほりえつよし　博士後期課程）

特集：ケアの現場に触れる

待機するゆとり

会澤久仁子

授業で村田さんから傾聴について伺ったとき、村田さんは、ただ話を聞くことが相手への援助になり、まず相手の話を上手に聞けることが援助の基本であると述べられた。私は、村田さんのやり方で上手に人の話を聞けて援助できるなら、やってみたいと思った。そこで、集中して傾聴を試みその感触を得て、また反省するよい機会になると思い、老人保険施設ガラシアでのボランティアに参加した。

私は初めてガラシアを訪ね、5階のフロアでボランティアをした。5階には主に軽い痴呆の方が入所されている。時によるそうだが、その日は入所者の方々は落ち着いていた。そのためか私は特別な違和感を感じることなく入所者の方々の中にいることができた。ただ、食堂で車いすに座ったまま眠っている方がかなりいて、私はそれを見ていると、その方々には何かすることがないのかと思ったりした。誰でも何かすることがあれば嬉しかったり楽しかったりするだろう。しかしそれぞれの方がどんなことをできるのかどうか、したいのかどうか、初めての私にはわからなかった。じっとしている方は、したいことができない環境だから、それをするのを諦めているのかもしれない。だから本人や周りの人は自由度の高い環境になるよう努力することが重要だ。しかしその一方で、本人にとっては限られた環境を受け入れることもまた毎日を暮していくための課題であろう。より多くの自由を求めることと、それがとても叶わず苦難を耐えたり、不自由や死を受け入れなければならないことの、その両方をよ